

ヤハヤー・シュローダー ドイツ出身の元世俗主義者



僕の名はヤハヤー・シュローダーです。僕は「ヨーロッパ人」ムスリムです。僕は11ヶ月前、17歳でムスリムになりました。僕はドイツのポツダムに住んでいます。非ムスリム国家における、僕のムスリムとしての経験について皆さんと共有したいと思います。

僕はイスラーム改宗者として、ここで育った生来のムスリムたちよりも、ディーン（宗教）の実践が容易な状況にあると思っています。僕の知るほとんど全ての生来のムスリムたちは、ドイツ人との同化を望んでいます。彼らにとって、イスラームとは単なる伝統的なものであり、ドイツ人として認められるためには棄ててしまわなければならないものなのです。しかし、たとえ彼らが宗教を棄て去ってしまっても、ドイツ人たちは彼らを受け入れたりほしくないことを彼らは知りません。

僕は小さな村で育ちました。僕は母・義父と共に、大きな庭とプール付きの豪邸に住んでいました。僕はティーンエイジャーとして、「クールな」人生を生きていました。僕は他のドイツ人の若者たちと同じように、何人かの友人たちと馬鹿げたことやアルコールを飲んだりして遊び回っていました。

ドイツでのムスリムとしての人生は、特に僕のようなドイツ人ムスリムにとって、人が思うよりも困難なものです。なぜなら、一般ドイツ人にイスラームについて知っていることは何かと問えば、答えはアラブ人に関

わるものが返ってくるからです。彼らにとっては数式のように、イスラームすなわちアラブなのです。

彼らは僕らの巨大な共同体についても知りません。僕がイスラームに改宗した際は、家を出て、ベルリン近郊のポツダムにあるコミュニティに引っ越さなければなりませんでした。僕は豪邸とそれにまつわる物質的なものを棄て去ったのです。

母・義父と住んでいた頃は、全てがありました。豪邸、お小遣い、テレビ、プレイステーション。お金の心配をする必要は全くありませんでしたが、幸福ではありませんでした。僕は、他の何かを探し求めていたのです。

16歳になったとき、僕は2001年にムスリムになった実父を通して、ポツダムのムスリム・コミュニティに紹介されました。僕は月に一回、父に会いに行っていたので、彼と毎週日曜日に催されていたコミュニティ集会に行きました。

その当時、僕がイスラームに興味を持っていることに気付いた父は、一緒にいるときは敢えてイスラームのことを話したりはしませんでした。なぜなら彼は僕が知識ある人々から学ぶことを望んでおり、人が「彼がムスリムになったのはまだ17歳だから、父親のすることを真似したがる年頃なんだよ」と言われるのを嫌ったからです。

僕はそれに同意し、毎月コミュニティに足を運び、イスラームについて多くのことを学びましたが、あの事故が起きて以来、僕の考え方はすっかり変わりました。ある日曜日、僕はムスリムのコミュニティ・スイミングに行き、プールに飛び込もうとした際に頭から地面に激突し、背骨を2ヶ所骨折したのです。

父が僕を病院に運び込むと、僕は医師にこう言われました。

「君は酷い骨折の仕方をしたんだ。少しでも変に動くと、障害を持つことになるよ。」

その言葉は僕をちっとも励ましはしませんでした。手術室に入る直前、ムスリム・コミュニティの友人の一人はこういうことを言ってくれました。「ヤハヤー、今の君はアッラー（神）の御手の中にあるんだ。ジェットコースターに乗っていると思えばいい。それを楽しみながら、神に全てを委ねよう。」その言葉は僕をすごく励ましました。

手術には5時間を要し、僕はその3日後に目を覚ましました。僕は右腕を動かすことが出来ませんでしたが、自分が地球上で最も幸福な人間だと

思いました。僕は医師に「右腕のことは構わない。神によって生かされているだけで十分幸せだ」と言いました。

医師たちは、僕に数ヶ月の入院が必要だと言いました。しかし僕は懸命にリハビリに励んだため、病院にいたのは僅か2週間だけでした。ある日、医師が来てこう言いました。「今日は階段を一段登れるようになりましょう。」僕はそのリハビリを、2日前に既に自分一人で済ませていました。

現在、僕は再び右腕を動かすことが出来るようになりました。アル＝ハムドゥ・リッラー（神に称賛あれ）。この事故は、僕の性格を大幅に変えました。

僕は、もし神がそうお望みになれば、人の人生は一秒で変わってしまうことを知りました。それゆえ、僕は人生について真剣に捉え始め、自分の人生とイスラームについて考える事に多くの時間を費やしましたが、当時はまだあの小さな村に住んでいました。

僕はムスリムになりたくてしょうがなかったため、家を出なければなりませんでした。僕はポツダムに行くため、母と義父、そして裕福な暮らしから離れたのです。僕は父の小さなアパートに引っ越し、キッチンで寝泊まりしましたが、僕に必要なだったのは数着の衣服、学校の教科書、そして数枚のCDだけだったので、苦にはなりませんでした。

読者の一部には、僕がすべてを失ってしまったかに映るかも知れませんが、僕はあの酷い事故の後に病院で目覚めたときと変わらず幸福です。その翌日は、ラマダーン月の一日でした。さらにその翌日は、新しい学校での最初の日でした。

学校での最初の日翌日、僕はシャハーダ（イスラーム改宗の信仰証言）をしました。神に讃えあれ。新しいアパート、新しい学校、初めての家族から離れた生活。僕にとっては全てが新しいことの連続でした。学校で僕がムスリムであることが分かると、他の生徒達からからかわれ始めました。

彼らが日々メディアから植え付けられていることを考えると、それはごく当然のことなのかも知れません。「テロリスト!」「オサマ・ビンラディンが来るぞ!」「汚らしいムスリムめ!」一部はただ単に僕が狂人であると考えました。彼らは僕がドイツ人であることすら信じようとしませんでした。

しかしその10ヶ月後の今、状況はすっかり変化しました。僕はクラスメートへのダアワ（イスラームへの布教）に励み、僕が学校で唯一のムスリムであるにも関わらず、礼拝室を得ることが出来ました。

クラスメートたちもからかうことを止め、イスラームについての真剣な質問をして来るようになりました。彼らはイスラームが他の宗教とは異なることに気付いたのです。彼らはイスラームがクールだということを知ったのです！

彼らは、ムスリムにはお互いへのもてなしであるアダブ（礼節）があることを知りました。また僕らには同調圧力に屈しない独立性があることにも気付きました。僕らはありのままに振る舞い、校内のグループに属したりする必要を感じないのです。

僕の学校には3つの主要なグループがあります。ヒップホップ、パンク、そしてパーティー系グループです。皆は他人に認めてもらうために、いずれかのグループに属そうとします。

もちろん、それは僕以外です。僕は皆と仲良くすることが出来ます。僕は「クール」になるために特別な衣服を着たりはしません。なので、彼らは僕とムスリムの友人たちをバーベキュー・パーティーにいつも誘ってくれるようになったのです。

素晴らしいことに、彼らはムスリムとしての僕を認め、僕のためにハラール・フードを用意し、僕たちムスリム用のグリルを個別に用意してくれたことです。ここの人々は、イスラームに寛容であると感じています。